

第2回 四国生物多様性会議 高知グループワーキングレポート

a. 「奥山」 レポート

テーマ：奥山

参加者：8名

レポート内容は、●課題、・課題に対する意見、グループリーダーコメントとしてまとめた。

●奥山の状況がわからない。

- ・奥山とは、四国だと剣山・石鎚山の天然林、自然林など人の手が加えていないところ。
- ・四国ではほとんど人の手が入ってしまって、全く手つかずの場所は3~4%ぐらいしか残っていない。剣山山系、石鎚山系の一部である。
- ・人が住んでいるところより奥の山のこと。人が住まないところ。
- ・獣がいっぱいいるところ
- ・四国は多くの場所で拡大造林が行われ、奥山まで自然林が伐採されて人工林を植えた。
- ・奥山もある程度の手を加えることで、維持すべきである。
- ・平地や都市部にすむ人々は、そもそも奥山に対して関心がない、状況を知らない。
- ・人工林は大根畑と同じで、きちんと管理すべきある。

コメント)

奥山というあいまいな景観的イメージを具体的にする重要な課題である。人の手が加えられていないところ（原生林や自然林）という意見があったが、四国では、標高 1,000m 以上まで人工林として手が加えられており、林道も高標高域に設定されている。人の生活圏は標高 500m を目安として、人の手が加わらない標高 800m~1,000m 以上が奥山のイメージとなる。

●研究してからの管理が必要か？、つまらなく見える環境（生物多様性）の調査が必要。

- ・奥山の実態がわかっていないため、研究をしてから管理をする必要があるのではないか？
- ・植物については、既にある程度の調査は行っているため、それを参考に管理を行う。
- ・今後どのような変化があるかという経過を観測する調査は必要である。

コメント)

既に調べられていて根拠のあるものは参考にして管理や活動を実践すべきであり、調べられていない事柄については、調査研究などによる科学的根拠が必要と思われる。また、生物多様性が失われている経過やその結果を調査すべきと意見もあった。

●林道が多いと思うが「林道」をどう考えるか。

- ・林道、作業道、作業路など区別する必要がある。
- ・拡大造林により、多くの自然林が人工林に変わり、四国では人工林が標高 1,000m 以上にも存在する。それに伴い林道は標高 800m 以上や寒風山あたりでは 1,200m 付近にまでみられ、生物多様性の低下をもたらしている。

- ・四国の林道は連峰を縦断するように林道が作られている。
- ・場所によっては獣道を遮るように林道が作られたため、動物が被害にあうこともある。また連峰が林道でつながったことにより、獣たちの行動範囲、移動範囲も広がり食害、シカの増加にもつながった。
- ・人工林と自然林の間に林道が走っている。
- ・拡大造林された人工林は、伐採時期の 50 年生のものが増加している。それらを利用する林業と奥山の風景との調和を図らなくてはならない。
- ・奥山の姿として、林道のような人工物を排除すべきである。

コメント)

林道が課題として挙げられたのは重要な視点だと思われる。人が管理すべきであれば、そこにアプローチすべき手段が必要であり、また観光化すればより整備が必要とされる。人が積極的に手を加えるのか、手を加えないのか、林道をキーワードに課題が深まる。人の手が加わらない奥山のイメージとしては、林道など人工物を排除すべきという意見がオオに共通した意見とも出された。

●ニホンジカの食害（斜面崩壊・植生変化）、シカの食害どうするか？

- ・奥山の植生がなくなる。斜面崩壊や生態系の破壊の恐れある。
- ・土壌流出が起こり、物部川が濁流するなどが起きている。
- ・下手に対策をとると（高密度の状態で、十分な狩猟圧が加えられないと）、逆に増える恐れもある。
- ・いっそのこと、ほっておいて自然に減るのを待つのはだめなのか？
- ・ほっておくと、先に植生が崩壊してしまう。
- ・現在の生息頭数 10 万頭に対し、理想の生息頭数は 1 万 5 千頭である。適正な生息密度は、1ha 当たり 3～5 頭だろう。
- ・シカの増加の原因としては、温暖化の影響などによる豪雪が少なくなったため、捕食者であるオオカミの絶滅、狩猟者の減少などがあげられている。
- ・シカの増加でヒル・ダニなども増加しているのではないか。人間への被害へつながる。
- ・体制を整備し、計画的な管理を実施する必要がある。
- ・都市部の人は関心がないため、問題を認識していない。

コメント)

奥山に限らず、四国の全体でシカの個体数増加による農林作物の被害、自然植生の影響が問題となっている。このシカ問題は、多くの要因がからみ、多くの問題に発展しているため、社会的な問題として認識して取り組む必要があると感じた。都市部の人へも関心を高めることが必要であるとも意見があった。

- 人が入ったほうが良いのか？入らないほうが良いのか？、あくまで奥であってほしい。観光資源としての奥山。登山者のトイレをどうするか。

- ・奥山の在り方としては極力自然の遷移に任せる。どうしても人が手を加えないと絶滅してしまうような希少種などは、維持できる範囲で保護などを行う。
- ・人が入ることはいいと思う。
- ・観光資源として奥山に入るとするなら、それなりの自然に対する予備知識が必要である。ガイドをつけて奥山を解説、案内できる人を養成する必要がある。
- ・トイレの問題もあり、自分のものは自分で持ち帰るという考え方もある。
- ・山菜とりなど、昔は庶民が誰でも楽しめる場として、共有財産としての価値があった。
- ・付加価値を見つける。例えば、森林浴、登山、山菜とり以外にも生態系サービスの価値があるのではないか。CO2 吸収、生物多様性の面から奥山の重要性、付加価値を見つける。
- ・森林環境税なども生態系サービスの位置づけになるのではないか？
- ・山の公共的価値について、自分らが金銭と支払うのには抵抗感がある。
- ・実際に山に入り、経験してみると変わる。
- ・街、平地に住む人たちは、「奥山」に対するイメージがなく、関心がない。そもそも知らないし知る機会が少ない。
- ・知ってもらうには、来てもらうしかない。自然観察会などのイベントを開く。参加したらよく分かるが、参加するまでが中々難しい。特に奥山は子供だけ、車を持っていないと来られないという点から親に興味を持ってもらい参加してもらうところが重要である。

コメント)

奥山の価値に対する課題がいくつかあがった。存在そのものの価値として、人が手を加えてよいものか、手を加えてはいけないものかその価値に対する認識が分かれる重要な課題と思われる。リクリエーションとしての価値、景観を楽しむのとしての価値、存在そのものとしての価値など認識が多様化するが、公益機能としての価値について、十分に意見が出されなかった。奥山は人々の生活と直接触れる機会が少ないため、価値認識の違いが大きいと思われる。奥山を体験してもらうなど、認識を広める取り組みも必要と言える。

●くくりわなのサイズや設置区域、ツキノワグマの生息域と移動経路などの問題

- ・シカの問題に対し、四国のツキノワグマの保護が対立した形になっている。
- ・シカの個体数増加はツキノワグマの生息に影響しないのか？
- ・くくりわなについて環境省が規制強化したが、どこに設置したかなど情報共有して、設置者がきちんと管理をすれば、錯誤捕獲などの問題は軽減される。
- ・クマは冬の季節に冬眠するので、冬季にはくくりわなが使用できる。
- ・四国は落葉広葉樹林が少ないため、ツキノワグマの生息域は低密度で、剣山地域に生息が限られている。
- ・クマも子ジカやシカの死体を食べるので、必ずしもシカの増加がマイナスにはならない。

コメント)

増えすぎて問題化しているシカの対策と、数が減り絶滅のおそれがあるツキノワグマの保

全が対立する構造になっていることが指摘された。ツキノワグマがすめる森は生物多様性が高いとも例えられ、自然植生が回復し、奥山景観が増えることが望ましい。一方で、奥山でシカが増えていることにより、自然植生への影響など多くの問題が発生しているため、シカ対策も急務と言える。

●ブナ林再生をどうすすめるか。管理者との関係、合意作り。

- ・奥山は国有林地。うまく関係づくりをして管理していかなければならない。
- ・山菜採りなども土地持ちの了解がないとできないことである。

コメント)

奥山の価値につづき、奥山を象徴するブナ林の再生の必要性も課題にあがった。奥山のイメージとして、人の手が入らず、ブナ林が多い場所として、生物多様性が高く、豊かな森林ともとらえられる。そこではかつては山菜採りが楽しみとなっていたが、今では土地所有者など、地権者との調整が課題としてあげられた。

●源流域、溪流、水系の問題

コメント)

源流域などの水系を保全する課題もあげられた。

以上